

いよいよ今年<sup>ことし</sup>の四旬節<sup>しじゅんせつ</sup>も後半<sup>こうはん</sup>に入り<sup>はい</sup>、もう四旬節<sup>しじゅんせつ</sup>第5主日<sup>だいごしゅじつ</sup>を迎え<sup>むか</sup>ています。復活祭<sup>ふっかつさい</sup>まで残り<sup>のこ</sup>わ  
ずか2週間<sup>にしゅうかん</sup>となりましたが、その間<sup>あいだ</sup>、教会<sup>きょうかい</sup>の公開ミサ<sup>こうかい</sup>はまだ行われ<sup>おこな</sup>ないので、信者<sup>しんじゃ</sup>の皆さん<sup>みな</sup>の  
それぞれの準備<sup>じゅんび</sup>が大切<sup>たいせつ</sup>だと思<sup>おも</sup>います。そもそも四旬節<sup>しじゅんせつ</sup>の歩み<sup>あゆ</sup>は教会<sup>きょうかい</sup>の典礼<sup>てんれい</sup>を通<sup>とお</sup>して示<sup>みちび</sup>され、導  
かれるものですが、去年<sup>きょねん</sup>も今年<sup>ことし</sup>もそれができ<sup>ほんとう</sup>なくな<sup>ざんねん</sup>って、本当に残念<sup>きも</sup>な気持ち<sup>いっぱい</sup>で一杯<sup>いっぱい</sup>です。けれど  
も、神様<sup>かみさま</sup>の愛<sup>あい</sup>と憐れみ<sup>あわ</sup>はいつも信者<sup>しんじゃ</sup>の皆さん<sup>みな</sup>の上に豊<sup>うえ</sup>かに注<sup>ゆた</sup>がれていますので、それに信賴<sup>そそ</sup>を置<sup>しんらい</sup>い  
て、残り2週間<sup>のこ</sup>の四旬節<sup>にしゅうかん</sup>を、毎日<sup>しじゅんせつ</sup>のミサ<sup>まいにち</sup>の御言葉<sup>みことば</sup>を黙想<sup>もくそう</sup>しつつ、また、祈り<sup>いの</sup>の中でその日々<sup>なか</sup>を着  
実に過<sup>じつ</sup>ごすこと<sup>す</sup>ができれば幸<sup>さいわ</sup>いです。

今日<sup>きょう</sup>の第1朗読<sup>だいいちろうどく</sup>で、神様<sup>かみさま</sup>はエレミヤ預言者<sup>よげんしゃ</sup>の口<sup>くち</sup>を通<sup>とお</sup>して、ご自分<sup>じぶん</sup>の民<sup>たみ</sup>、イスラエル<sup>いすらい</sup>と新<sup>あたら</sup>しい契  
約<sup>やく</sup>を結<sup>むす</sup>ぶこと<sup>こと</sup>について語<sup>かた</sup>られました。神様<sup>かみさま</sup>は先<sup>ま</sup>ず、その昔<sup>むかし</sup>の契約<sup>けいやく</sup>の本質<sup>ほんしつ</sup>について語<sup>かた</sup>られましたが、  
私<sup>わたし</sup>たちは「主人<sup>しゅじん</sup>」という言葉<sup>ことば</sup>からそれが分<sup>わ</sup>かります。つまり、昔<sup>むかし</sup>の契約<sup>けいやく</sup>によって神様<sup>かみさま</sup>はイスラエ  
ルの主人<sup>しゅじん</sup>となられ、イスラエル<sup>いすらい</sup>は神様<sup>かみさま</sup>に從<sup>したが</sup>うべき民<sup>たみ</sup>となったということ<sup>いみ</sup>を意味<sup>ことば</sup>する言葉<sup>ことば</sup>なのです。  
しかし、イスラエル<sup>いすらい</sup>は自分<sup>じぶん</sup>たちの主人<sup>しゅじん</sup>である神様<sup>かみさま</sup>の代わり<sup>か</sup>に、権力<sup>けんりょく</sup>を振<sup>ふ</sup>るう王<sup>おう</sup>たちと家来<sup>けらい</sup>たち、  
また、偶像<sup>くわうざう</sup>に從<sup>したが</sup>う偽<sup>いつわ</sup>りの預言者<sup>よげんしゃ</sup>や祭司<sup>さいし</sup>たちを自分<sup>じぶん</sup>たちの主人<sup>しゅじん</sup>とし、彼ら<sup>かれ</sup>に從<sup>したが</sup>いました。それは  
イスラエル<sup>いすらい</sup>の歴史<sup>れきし</sup>を見<sup>み</sup>ても良<sup>よ</sup>く分<sup>わか</sup>りますが、彼ら<sup>かれ</sup>はエジプト<sup>えじぷと</sup>でファラオ<sup>ふらう</sup>を主人<sup>しゅじん</sup>としたり、そこか  
ら解放<sup>かいほう</sup>された後<sup>あと</sup>の荒れ野<sup>あ</sup>では偶像<sup>くわうざう</sup>を敬<sup>うやま</sup>ったり、また、約束<sup>やくそく</sup>の地<sup>ち</sup>に定着<sup>ていちゃく</sup>した後<sup>あと</sup>からは、隣<sup>となり</sup>の国<sup>くに</sup>に  
憧<sup>あこが</sup>れたりしたのです。その結果<sup>けっか</sup>、イスラエル<sup>いすらい</sup>は自分<sup>じぶん</sup>たちが憧<sup>あこが</sup>れに憧<sup>あこが</sup>れた異邦人<sup>いほうじん</sup>の国<sup>くに</sup>の僕<sup>しもべ</sup>となっ  
たわけ<sup>わけ</sup>です。神様<sup>かみさま</sup>はそのイスラエル<sup>いすらい</sup>の悪<sup>あく</sup>への傾<sup>かたむ</sup>きを指摘<sup>してき</sup>しつつ、新<sup>あたら</sup>しい民<sup>たみ</sup>には彼ら<sup>かれ</sup>の胸<sup>むね</sup>に律法<sup>りっぽう</sup>を  
お授<sup>さず</sup>けになり、彼ら<sup>かれ</sup>の心<sup>こころ</sup>にそれを記<sup>しる</sup>されるとおっしゃ<sup>ふた</sup>いました。もはや二<sup>ふた</sup>つの石板<sup>せきばん</sup>に書<sup>か</sup>いてある  
昔<sup>むかし</sup>の契約<sup>けいやく</sup>書<sup>しょ</sup>、つまり「十戒<sup>じゅっかい</sup>」は、昔<sup>むかし</sup>の民<sup>たみ</sup>によって破<sup>やぶ</sup>られたということ<sup>こと</sup>でしょう。なぜなら、神  
様<sup>かみ</sup>にだけ從<sup>したが</sup>順<sup>じゅん</sup>となるべき<sup>べき</sup>なのに、イスラエル<sup>いすらい</sup>は王<sup>おう</sup>たちや偶像<sup>くわうざう</sup>の預言者<sup>よげんしゃ</sup>、その祭司<sup>さいし</sup>たちに從<sup>したが</sup>い、  
また、隣<sup>となり</sup>の国<sup>くに</sup>とその華々<sup>はなばな</sup>しい文化<sup>ぶんか</sup>にあこが<sup>あこが</sup>れて、それら<sup>それら</sup>に從<sup>したが</sup>順<sup>じゅん</sup>であった<sup>こと</sup>からです。

今日の福音の中で、フィリポとアンデレはイエス様に、何人かのギリシア人がイエス様との出会いを望んでいることを伝えました。そこでイエス様は、ご自身が受けることになっている栄光について語られました。その栄光とは勿論、御父から授けられる復活の栄光で、イエス様はそれをいただくためには御父に従わねばならないとおっしゃったわけです。イエス様は御父に従うこととは何かを既に知っておられたでしょう。それは十字架の道を歩むこと、つまり、神様の小羊としてすべての人の罪の赦しのためのいけにえとなることなのです。しかし、その苦しみについての人間的な悩みや不安、恐怖は何と大きかったことでしょう。イエス様の心が騒いだのは当然のことだったと思います。

その葛藤とは、いわゆる二者択一の問題、つまり、「御父の意向に従って、苦しみと十字架を素直に受け入れるか。」、或いは、「それを拒むか。」についてのことです。受け入れたら、約束された復活の栄光をいただけますが、その先にある苦難を受けねばなりません。逆に、それを拒んだら、苦難を免れることはできますが、その復活の栄光を諦めなければなりません。そこでイエス様は神様に祈りましたが、それは苦しみから逃れることを求める祈りではなく、むしろ、御父の栄光が表わされることを願う祈りでした。即ち、イエス様はご自分が御父に従うことができるように、と祈り求められたのです。そして、これからご自分が成さねばならない戦いについて、前もって示されましたが、それはこの世の支配者との戦いでした。イエス様が言われたこの世の支配者とは、いわゆる、悪とその力に従う人間でもあるし、その誘惑でもあります。それは、例えば、権力や財力、そして、それらのものから与えられる平和や幸福などですが、それはあくまでこの世が与えるもので、それを得るためには何らかの形でも神様に背を向けねばなりません。イエス様はこの祈りを通して、ご自身の公生活の初期から受けた様々な誘惑に打ち勝ったのです。そして、神様への従順からご自分の命を捧げ、神様がかつてエレミヤの口を通して約束された、

「新しい契約のいけにえ」となられたのです。勿論、その契約の掟は「神様を愛し、また、互いに愛し合う。」ことでしょう。その掟は粗い石板ではなく、暖かい心に刻まれましたが、イエス様は愛と慈しみをもって人々に寄り添い、同じ愛を彼らの心に見せてくださったのです。

**今日の第2朗読で、使徒パウロはイエス様の悩みと葛藤について話しながら、イエス様がそれらに打ち勝ち、神様に従順であったことを語っています。そこでパウロは、イエス様は神様の御子であるにもかかわらず、自ら人間となって苦しみを受けられ、神様への従順を学ばれたと言いました。それはイエス様に従う全ての人に、神様への従順を示し、また、教えるためでした。そして、パウロはその従順によってイエス様が完全なものになったとも言いましたが、それは不従順によって失った元々の人間の品位が取り戻されたことを表した話なのです。すなわち、イエス様はアダムとエバの不従順による罪をご自分の従順によって償い、その罪によって失われた神様との真の交わりを、十字架上の愛の御業によって回復してくださったということです。そのイエス様に従う人、つまり、わたしたちはもはや罪の奴隷でなく、「神様を愛し、互いに愛し合う。」という掟を持つ神様の新しい民なのです。ですので、私たちがこの世のものの奴隷となっははいけないし、それを求め、さまよってもいけません。むしろ、それらのものと戦い、神様の愛と慈しみ、正義と平和のために務めを果たすべきです。**

**ところで、今日の福音はギリシア人の頼みを受けたフィリポとアンデレ、この二人の話から始まりました。昔の民は異邦人に憧れたり、彼らとのつながりを大事にした指導者たちに従ったりしましたが、今日の福音はその異邦人でさえ、真の神様を探し求めていることを示しています。きっと、その二人の弟子は彼らをイエス様に導こうとしたのでしょう。そこでイエス様は一粒の麦の例えを聞かせてくださいました。その一粒の麦はイエス様ご自身であり、イエス様に従うわたしたちでもあります。イエス様は神様の御言葉として、常に神様の御心に従われました。同じ**

く、<sup>わたし</sup>私<sup>ふたり</sup>たちも「<sup>さんにん</sup>二人、<sup>つど</sup>三人の集い」とも言われる<sup>い</sup>教会<sup>きょうかい</sup>で、イエス様の<sup>さま</sup>御言葉<sup>みことば</sup>と<sup>あい</sup>愛<sup>せいたい</sup>のご聖体<sup>はぐく</sup>で育  
まれる<sup>ひとつぶ</sup>一粒<sup>むぎ</sup>の麦<sup>むぎ</sup>とならなければなりません。<sup>しんじゃ</sup>信者<sup>みな</sup>の皆さん<sup>ひとつぶ</sup>が一粒<sup>あい</sup>の愛<sup>むぎ</sup>の麦<sup>むぎ</sup>としての<sup>つと</sup>務め<sup>は</sup>を果たすこ  
とができるように、お祈り<sup>いの</sup>いたします。